

研究結果報告書

研究結果

本研究は万葉集における万葉仮名の使用頻度の調査と統計から始まり、さらに万葉集の一字一音式の表記と正訓字との関係を調べてみた。そして、一字一音式の万葉仮名が先に成立し、正訓字の出現があとのことだとほぼ判明できると思う。

万葉仮名の正訓字の選択と使用方法の研究はまず万葉仮名の正訓字の使用頻度を調べてみた。

調査の結果は使用頻度の高い漢字の大多数は名詞で、動詞はわずか「来」、「見」、「知」、「思」、「恋」、「念」、「聞」、「持」、「去」などの数字だけであることがわかった。万葉集の本文に「見」、「知」、「思」、「聞」という漢字が音仮名として多く使われ、「来」、「持」、「去」などの漢字は詞書によく見られるが、ただ「恋」という漢字だけが全部正訓字として使用される。もし本文にある「恋」の音仮名を全部数えてみると、「恋」という言葉の使用数が850にもものぼる。

「万葉集」に一字一音式で表記される歌に「恋」だけを正訓字にする例が少なくない。

そもそも「恋」という漢字の漢文における原義について、「広漢和辞典」に心をかけて思う、慕う、兄弟相恋う、男女が互いに思いをよせあうと解釈されるが、中国の辞書に「康熙字典」は「恋」を慕也と解釈し、用例として「兄弟相恋」とあげている。

万葉仮名の正訓字の選択と使用方法の研究により、「恋」と「相～」などの正訓字の使い方は万葉歌人と万葉集編集者の漢字を創造的に使用した好例だとわかる。

万葉集における正訓字と漢字の原義を比較して、万葉時代の日本古代文学の特質の成因についても研究した。恋歌を表示するために「恋」のような漢字を正訓字として使われるとき、その漢字に原義のない意味を与えられた。つまり、和歌における漢字の活用は日本語の発展史に重要な役割を果たしたのである。

2011年5月12日私は四川外国語学院成都学院で、同19日に西華大学で本研究についての講演をし、住友財団から助成を受給した経緯をも紹介した。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名 「万葉仮名の移り変わり」と古代和歌の発展」

発表者 宋再新

会議名 東アジア比較文化国際会議日本大会

日時 2010年10月23日から25日まで

場所 奈良

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

題名 「万葉仮名の変遷の研究」(中国語題名 「万葉仮名変遷之研究」)

著者 宋再新

出版社 四川大学出版社

発行時期 2011年12月(予定)